

1章『バトルとアイドル』 10

「お前たちの名前は、アマタペアレディースじゃないのか？」。九谷焼姫が怪訝な顔でカノンとセシルを見た。

「そんなダサイ名前、認めるわけないでしょ！ 私たちは、あみたん娘よ！」

カノンとセシルの体から発せられている光にビビったのか、2人を睨みつけていた蛇たちの勢いが削がれているようだ。

「今だ！ カノン、セシル！ 名乗りを上げるんだ」。あみたんが何かを思いついたようだ。

「名乗り？ 何それ？」。セシルとカノンが首を傾げるも、「いいから、今から僕の言う通り、復唱するんだ」

あみたん娘 The NOVEL

酒井 直行

と、あみたんが2人に向かって強引に命令した。そしてステックを通じ、テレパシーで唱えるべき名乗りを伝達する。訳もわからないまま、2人はその通り名乗ることになった。

「慈悲の力で！」
「知恵の光で！」
最後は2人同時に名乗りを上げた。
「弥陀の本願貫きます！」
その瞬間、カノンの体中

茫然と立ち尽くすカノンとセシルの前で、九谷焼姫がキッとあみたんを睨み上げた。
「まさか、これほどの法力を、この2人に授けてしまったというのか……弥陀」



キャラクター原案 松原 秀典
イラスト 那智 泉

まずはカノンだ。「鳳凰啼けり！」
続いてセシル。「彼の高き岡に！」
「あみたん娘、カノン」
「同じく、セシル」

込もうとしていた巨大な蛇には矢のような形をした光が突き刺さり、バキバキバキという鈍い音と共にその長い体を五つに断裁してしまった。
「どうなっているの、これ？」。

「悔いはないのだな？」
「元よりそのつもりだ。あの日、あの者たちに誓って以来」
「それが、この世の秩序を乱すことになるうとしても、か？」
「笑止。秩序を乱すのはそちらの方だろう。夜叉！」
あみたんが厳しい口調で、九谷焼姫に叫んだその言葉、それは「夜叉」だった。それが意味するモノが絶望と気づくまでにはまだまだ時間が必要だった。